大衆文学大系

15

吉川英治

監修＝大佛次郎　川口松太郎　木村毅

講談社

大衆文学大系15　吉川英治集

昭和四十七年六月二十日　第一刷

著者　吉川英治
装幀者　田中一光
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目十二番二十一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五一一一一(大代表)振替東京三九三〇
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　大製株式会社
定価　二八〇〇円
©吉川文子　一九七二年
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

0393-136152-2253 (0)　(文2)

目次

吉川英治集

宮本武蔵（続）　五
剣難女難　四四〇
あるぷす大将　六四四

解説　七六七
解題　七七〇
年譜　七七一

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

吉川英治集

宮本武蔵

空の巻（つづき）

一指さす天

一

「弟子にする」

武蔵は、その場で、三之助に言葉をつがえた。

三之助の欣びは、非常なものだった。子供は、欣びをつつまない。

二人は、一度、家へ戻った。――明日はもうここを去るというので、三之助は、こんな茅屋でも、自分まで三代も住んだ小屋かとながめて、夜もすがら、祖父の思い出や、祖母や亡母の事などを、武蔵へ話して聞かせた。

そうして、翌る日の朝。

武蔵は、支度して、先へ軒を出ていた。

「――伊織、伊織。はやく来い。持って行くような物は何もあるまい。有っても、未練を残すな」

「はい。今参ります」

三之助は、後から、飛び出して来た。着のみ着のままの支度である。

今、武蔵が「伊織」と彼を呼んだのは、彼の祖父が、最上家の臣で、三沢伊織といい、代々伊織を称して来た家だと聞いたので、

（おまえも、わしの弟子となって、侍の子に返った機に、祖先の名を襲いだがよい）

と、まだ元服には早い年齢であったが、ひとつの心構えを抱かせるために、ゆうべからそう呼ぶことにしたのであった。

然し、今飛び出して来た姿を見ると、足にはいつもの馬子草鞋を穿き、背中には、粟飯の弁当風呂敷を背負って、尻きり着物一枚、どう眺めても、侍の子ではない、蛙の子の旅立ちである。

「馬を遠くの樹へ持って行って繋いでおけ」

「先生、乗って下さい」

「いや、まあいいから、彼方へ繋いで帰って来い」

「はい」

きのう迄は、何かの返辞も、ヘイであったが、今朝からは急に、ハイに変っている。子供は、自分を改めることに、何のためらいも持たなかった。

遠くへ馬を繋いで、伊織は又、そこへ帰って来た。武蔵は、まだ軒下に立っている。

（何を見てるんだろう？）

伊織には、不審であった。

武蔵は、彼の頭に、手を乗せて――

「おまえは、この藁屋の下で生れた。おまえの肯かない気性、屈しない魂は、この藁屋が育ててくれたものだ」

「ええ」
と、武蔵の手をのせたまま、小さい頭はうなずいた。
「おまえの祖父は、二君に仕えぬ節操をもって、この野小屋にかくれ、おまえの父は、その人の晩節を全うさせるために、百姓に甘んじて、若い時代を、孝養に送り、そして、おまえを残して死んだ。——けれどおまえはもう、その親も送って、きょうからは一本立ちだ」
「はい」
「偉くなれよ」
「……え、え」
伊織は、眼をこすった。
「三代、雨露をしのがせて貰った小屋に、手をついて、別れをいえ、礼をのべろ。……そうだ、もう名残りはよいな」
いうと、武蔵は、屋内へ這入って、火を放けた。
小屋は見るまに、燃えあがった。伊織は、熱い眼をして見ていた。その眸が、余り悲しげなので武蔵は、説いて聞かせた。
「このままにして立ち去れば、後には野盗や追剝が住むに決っている。それではせっかく忠節な人の跡が、社会を毒する者の便宜になるから焼いたのだ。……分ったか」
「ありがとう御座います」
見ているうちに、小屋は一山の火となり、軈て、十坪もない灰に化ってしまった。
「さ。行きましょう」
伊織はもう先を急く。少年の心は、過去の灰には、何の感奮もなかった。
「いや、まだまだ」
武蔵は、首を振ってみせた。

二

「まだって？　……これからまだ、何をするんですか」
伊織は、いぶかしそう。
その不審顔を笑って、
「これから、小屋を建てにかかるんだよ」
と、武蔵がいう。
「え？　どうしてだろ。……たった今小屋を焼いちまったのに」
「あれは、きのう迄のおまえの御先祖の小屋。きょうから建てるのは、われわれ二人の明日から住む小屋だ」
「じゃあ、又ここへ住むんですか」
「そうだ」
「修行には出ないんですか」
「もう出ているではないか。わしも、おまえに教えるばかりではなく、わし自身が、もっともっと修行しなければならないのだ」
「なんの修行？」
「知れたこと、剣の修行、武士の修行——それは又、心の修行だ。伊織、あの斧をかついで来い」
指さす所へ行くと、いつの間にか、そこの草むらの中には斧だの鋸だの又、農具などだけが、炎をかけずに、取り残されてあった。
伊織は、大きな斧をかつぎ、武蔵の歩む後に尾いて行った。
栗林がある。そこには松も杉もあった。
武蔵は、肌を脱ぎ、斧を揮って樹を伐り出した。丁々と、生木の肉が白く飛ぶ。
——道場を拵える？　この平野を道場に修行する？
伊織には、いくら説明されても分る程度しか分らなかった。旅へ出ないで、この土地に止まる事が何だかつまらない。

どさっ——と樹が仆れる。次々に斧が仆してゆく。

血のさした武蔵の栗色の皮膚には、黒い汗がりんりと流れ出した。この日頃からの惰気、倦怠、孤愁などはみな汗となって流れるかのようだ。

彼は昨日の未明、一個の農民で終った伊織の父の墓のある山から——坂東平野の未開をながめて、勃然と、今日の事を、思い立ったのであった。

（暫く、剣を措いて、鍬を持とう！）

という発願だった。

剣を研くべく——禅をする、書をまなぶ、茶にあそぶ、画を描く、仏像を彫る。

鍬を持つ中にも、剣の修行はあるはずだと思う。

しかも、この広茫な大地は、さながらそのまま行道を待つ絶好な道場であり、又鍬と土には、必ず開墾が生じ、その余恵は、幾百年の末まで、幾多の人間を養うことにもなる。

武者修行は、由来、行乞を本則としている。人の布施に依って学び、人の軒端をかりて雨露をしのぐことを、禅家その他の沙門のように、当りまえなこととしている。

けれど、一飯の尊さは、一粒の米でも一茎の野菜でも、自分で栽ってみて初めてわかることである。それをしない坊主のことばがままロ頭禅としか聞えないように、布施で生きている武者修行が剣のみを研いても、それを治国の道に生かすことを知らず、又、社会ばなれな武骨一偏になってしまい易いことも当然である——と武蔵は思った。

武蔵は、百姓の業は、知っている。母と共に、幼い頃は、郷士屋敷の裏畑へ出て、百姓のすることもしたものだった。

けれど、今日からする百姓は、朝夕の糧のためではない。心の糧を求めるのだった。又、行乞の生活から、働いて喰う生活を学ぶためだった。

更にまた、野茨や沼草の繁茂にまかせ、洪水や風雨の暴力にも、すべて自然に対して、諦めの眼しか持たない農民に——子子孫々、骨と皮ばかりの生活を伝えて来ながらも、依然、眼をひらかない彼等に、身をもって、自分の考えを、植えつけてやろうという望みもかけた。

「伊織、縄を持って来て、材木をしばれ。——そして河原の方へ曳いてゆけ」

斧を立てて、ほっと、汗を肱で拭いながら、武蔵は命じた。

三

伊織は、縄を結びつけて、材木を曳いた。武蔵は、斧や手斧で、面皮をとる。

夜になると、手斧屑で焚火をし、火のそばに、材木を枕にして寝る。

「どうだ伊織、おもしろいだろうが」

伊織は正直に答えた。

「ちっとも、おもしろい事なんかないや。百姓するなら、先生の弟子にならなくたって、できるんだもの」

「今におもしろくなる」

秋が更けてゆく。

夜毎に、虫の音は減って行った。草木は枯れてゆくのである。

もうその頃には、この法典ケ原に、二人の寝小屋が建ち、二人は毎日、鋤と鍬を持って、まず足元の一坪から開墾し始めた。

もっとも、それにかかる前に、彼は一応この附近一帯の荒地を足で踏んで、

（なぜ、この天然と人とが離反したまま雑木雑草に委されているか）

を考査してみた。

（水だ）

と、まず第一に、治水の必要が考えられた。

小高い所に立ってみると、ここの荒野は、ちょうど応仁以後から戦国時代に亙る人間の社会みたいな図であった。

ひとたび、坂東平野に大雨がそそぐと、水は各々、勝手に河を作り、流れたい方へ奔流し、激したいままに石ころを動かす。

それらを収める主流というものがないのだ。天気の日眺めると、それらしいものは幅の広い河原を作っているが、天地の大に対する包容力が足らないし、元々、あるがままに出来た河原なので、秩序もないし、統制もない。

もっと無くてならないのに無いものは、群小の水を集めて、一体に指してゆくべき方角を持たないのだ。主体自らが、その折々の気象や天候にうごかされて、或る時は、野にあふれ、或る時は、林を貫ぬき、もっと甚だしい時は、人畜を冒して、菜田まで泥海にしてしまう。

（容易でないぞ）

と、武蔵は、踏査した日から思った。

それだけに、彼は又、非常な熱と興味をこの事業に抱いた。

（これは政治と同じだ）

と思う。

水や土を相手に、ここへ肥沃な人煙をあげようとする治水開墾の事業も、人間をあいてに、人文の華を咲かせようとする政治経綸も、なんの変りもないことと考える。

（そうだ、これはおれの理想とする目的と、偶然にも合致する）

此頃からの事である。——武蔵は剣に、おぼろな理想を抱き始めた。人を斬る、人に勝つ、飽くまで強い、——と云われたところで何になろう。剣そのものが、単に、人より自分が強いということだけでは彼はさびしい。彼の気持は満ち足りなかった。

一、二年前から、彼は、

——人に勝つ。

剣から進んで、剣を道とし、

——おのれに勝つ。人生に勝ちぬく。

という方へ心をひそめて来て今もなおその道にあるのであったが、それでも猶、彼の剣に対する心は、これでいいとはしない。

（真に、剣も道ならば、剣から悟り得た道心をもって、人を生かすことができない筈はない）

と、殺の反対を考え、

（よしおれは、剣をもって、自己の人間完成へよじ登るのみでなく、この道をもって、治民を按じ、経国の本を示してみせよう）

と、思い立ったのである。

青年の夢は大きい。それは自由である。だが、彼の理想は、今のところ、やはり単なる理想でしかない。

その抱負を実行に移すには、どうしても政治上の要職に就かなければできないからだ。

然し、この荒野の土や水を相手としてそれをやる分には、要職も要らなければ、衣冠や権力をもって臨む必要もない。武蔵は、そこに熱意と歓びを燃やしたのであった。

四

木の根瘤を掘る。また、石ころを篩う。

高い土を崩してならし、大きな岩は、水利の堤にするために並べる。

そうして日々、晨は未明から夕方は星のみえる頃まで武蔵とが、孜々として、法典ケ原の一角から開墾に従事し伊織ていると、時折、河原の向うに、通りがかりの土民たちが立ち止って、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

「何をしてるだ？」
と、いぶかり顔に、
「小屋あ、ほっ建てて、あんな所に、住む気でいるのか」
「ひとりは、死んだ三右衛門とこの餓鬼でねえけ」
うわさが拡がる。
嘲う者ばかりでもなく、中にはわざわざやって来て、親切に
呶鳴ってくれる者もあった。
「そこなお侍よう、おめえッち等、そんなとこを、せッせと開
墾いても、だめなこったぜよ。いっぺん暴風雨がやって来て見
さっせ、百日の萱だがなあ」
幾日か経って、又来てみても、黙々と、伊織を相手に、武蔵が
労働しているのを見ると、親切者も少し、腹を立てたように、
「おウい。くそ骨折って、つまらねえところに、水溜りを拵え
るでねえだ」
又——数日おいて来てみたところ、相変らず、二人の耳の無
いような姿が働いているので、
「阿呆よっ」
と、こんどは、ほんとに怒ってしまい、そして武蔵を、ふつ
うの智恵のない馬鹿者と見なして、
「藪や河原に、喰える物ンの芽が出る位ならよ、おらたちゃ
あ、太陽さまに腹あ干して、笛ふいて暮らすがよ」
「飢饑年は、無えわい」
「止めさらせ、そんなとこ、掘りちらすなあ」
「むだ骨折る奴あ、くそ袋もおんなじだよ」
鍬を打ち振りながら、武蔵は土へ向ったまま笑っている。
たしなめられてはいたが、伊織は時々、むッとして、
「先生、あんなこと、大勢していってるよ」
「ほっとけ、ほっとけ」

「だって」
と伊織は、小石をつかんで、抛りそうにするので、武蔵は
くわっと眼をいからせて、
「これッ。師のことばを聞かぬやつは、弟子ではないぞ。——
何する気かっ」
と、叱りつけた。
伊織は耳がしびれたようにハッとした。けれど、手に握った
石は素直に捨てられもせず、
「……畜生っ」
と、近くの岩にたたきつけて、その小石が、火花を出して、
二つに割れて飛んだのを見ると、何だか悲しくなってしまい、
鋤をすてて、しくしくと泣き出してしまった。
（泣け、泣け）
といわないばかりに、武蔵は、それも抛っておく。
すすり泣いていた伊織は、だんだん声を高めて、果ては、天
地にただ独りいるように、声をあげて、大泣きに泣き出した。
父の死骸を二つに断って、山の墓所へひとりで埋めに行こう
としたくらいな剛気を持っているかと思うと、泣けばやはり、
から子供であった。
——お父さん！
——おっ母さん！
——祖父。祖母っ。
届かぬ地下の人へ、届けよとばかり、訴えているかのよう
に、武蔵には、強く胸を打ってくる。
この子も孤独。われも孤独。
余りの伊織の泣き声に、草木も心あるもののように、蕭々
と、冷たい風に、黄昏近い曠野は晦く戦ぎはじめた。
ポツ、ポツ、とほんとの雨もこぼれて来て——。

五

「……降って来た。ひと暴れ来そうだぞ。伊織、はやく来い」
鍬や鋤の道具をまとめて、武蔵は小屋の方へ駈け出した。
小屋の中へ飛びこんだ時は、雨はもう真っ白に、天地を一色に降りくだいていた。
「伊織、伊織」
後から尾いて来たものとばかり思っていたところ、見ると彼の姿は、側にもいない、軒端にも見えない。
窓から眺めやると、凄まじい雷光が、雲を斬り、野面をはためき、それに眼をふさぐ瞬間――思わず手は耳へ行って、五体に雷神のひびきを聞くのであった。
「……」
竹窓のしぶきに顔を濡らしながら、武蔵は恍惚と、見とれていた。
こういう豪雨を見るたびに、風のすさぶ度に、武蔵は、もう十年近い昔になる――七宝寺の千年杉を思い出す、宗彭沢庵の声を思い出す。
まったく自分の今日あるのは、あの大樹の恩だと思う。
その自分が、今は、たとえ幼い童子にせよ、伊織という一弟子を持っている。自分に果して、彼の大樹のような無量広大な力があるか、沢庵坊のような肚があるか。――武蔵は顧みて、自分の成長を思うと気恥ずかしい心地がする。
だが、伊織に対しては、どこまでも自分は千年杉の大樹の如くであらねばならぬと思う。沢庵坊のような酷い慈悲も持たねばならぬと思う。又、それが、曽っての恩人に対しての、いささかな報恩ではないかとも思った。
「……伊織っ、伊織っ」
外の豪雨に向って、武蔵は再三再四呼んでみた。
何の返辞もない。ただ雷と、どうどうと軒先の水音が騒がしいのみである。
「どうしたのか」
武蔵すら、出てみる勇気もなく、小屋に閉じこもっていたが、そのうちに、はたと雨が小やみになったので、外へ出て見まわすと、何という強情な性質の童子だろうか、伊織はまだ依然として、前にいた耕地の所から一尺も動かずに立っているのだった。
（すこし白痴か）
とすら、疑えない事もない。
あんぐりと口を開いて、先刻、大泣きに泣いたままな顔をして、――もちろん頭からズブ濡れになって、泥田になった耕地に案山子みたいに立っているのだ。
武蔵は、近くの、小高い所まで駈けて行って、思わず、
「ばかっ」と叱った。
「はやく小屋へ這入れ、そんなに濡れては体の毒だ。ぐずぐずしておると、そこらに河が出来て、戻れなくなるぞ」
――すると、伊織は、武蔵の声をさがすように見廻して、にやりと笑って、
「先生は、あわてもンだなあ。この雨はやむ雨だよ。この通り、雲が断れて来たじゃないか」
と、一指を天にさしていった。
「……」
武蔵は教える子に教えられたような気がして、沈黙していた。
だが、伊織は、単純なのである。――武蔵のようにいちいち考えていったり為たりしているのではない。
「おいでよ、先生。まだ明るいうちにゃ、だいぶ仕事ができるよ」
と、その姿のままで、又、前の労働をつづけ始めた。

この師この弟子

一

ここ四、五日青空をみせて、ひよ、もずの高音に穂すすきの根の土も乾きかけて来たかと思うと又、野末の果てから脊のびをした密雲が、見るまに坂東一帯を、日蝕のように暗くしてしまった。伊織は、空を見て、

「先生、こんどは、ほんものが襲ってきたよ」

と、心配そうにいった。

いううちにも、墨のような風が吹く。帰る所へ帰り遅れた小鳥は、ハタキ落されたように地に墜ち、草木の葉はみな葉裏を白く見せて戦き立つ。

「一降り来るかな？」

武蔵が訊くと、

「一降りどころじゃないぜ、この空は――。そうだ、おらは村まで行って来よう。先生は道具をまとめて、早く小屋へ引揚げたほうがいいよ」

空を見ていう伊織の予言は、いつも外れたことがない。今も、武蔵へそういい残すと、野分をよぎる鳥のように、見え隠れして草の海をどことなく駈けて行った。

果して、風も雨も、伊織のいったとおり、いつものとは変って、兇暴に募ってくる。

「――何処へ行ったのか」

武蔵はひとり小屋へ帰ったが、案じられて時々外を見た。

きょうの豪雨は常と違う。おそろしい雨量である。そして一瞬にハタとやむ。やんだかと思うと前にも増し降ってくる。

夜になった。

雨はよもすがら此世を湖底としてしまうかとばかり降りぬいた。ほっ建小屋の屋根はいくたびも飛ぶかと危ぶまれ、屋根裏に葺いてある杉皮が、いっぱいに散りこぼされた。

「困ったやつ」

伊織はまだ帰らない。

夜が明けても猶見えない。

いや夜が白みかけて、きのうからの豪雨のあとを見渡すと、猶の事、伊織の帰りは絶望された。日頃の曠野は、一面の泥海となっている。所々、草や木が、浮洲のように見えるだけだった。

ここの小屋は、やや高い所を選んであるので、幸いに、冒されないが、すぐ下の河原は、濁流が押し流れて、さながら大河の奔激である。

「……もしや？」

武蔵はふと案じ出した。その濁流に流されてゆく種々な物を見て、ゆうべ闇夜に帰ろうとした伊織が、過まって、溺れでもしてしまったのではあるまいか――と聯想されたからである。

だが、彼はその時、ごうごうと地も空も水に鳴る暴風雨の中で、伊織の声をどこかに聞いた。

「せんせーいっ。……先生ーッ」

武蔵は、鳥の浮巣みたいにみえる彼方の洲に、伊織らしい影を見た。いや伊織にちがいない。

何処へ行ったのか、彼は牛の背に乗って帰って来たのだ。牛の背には自分のほかに、何か縄で絡げた大きな荷物を、後先に縛しつけている。

「おおう……？」

と見ているまに、伊織は、牛を濁流へ乗り入れた。

濁流の赤いしぶきと渦は忽ち彼と牛をつつんでしまう。流され流され、やっと、此方の岸へ着くと牛も彼も、身ぶるいしながら、小屋のある所へ駈け上って来た。

「伊織！　何処へ行ったのだ」

半ば怒るように――半ばほっとしたように、武蔵がいうと、伊織は、

「何処へって、おら、村へ行って、食物をうんと持って来たんじゃないか。この暴風雨は、きっと半年分も降ると思ったから。――それに暴風雨がやんでも、この洪水はなかなか退かないに極ってるもの」

二

武蔵は、伊織の悧発なのに愕いたが、考えてみれば彼が悧発なのではない、自分が鈍なのである。

天候の悪兆候をみたら、すぐ食物の準備を考えておくことは、野に住む者の常識で、伊織は、嬰児の時から、こういう場合を、何度も、経験しているにちがいない。

それにしても、牛の背から下ろした食物は、少いものではない。莚を解き、桐油びきの紙を解いて伊織が――

「これは粟、これは小豆、これは塩魚――」

と、幾つもの袋をならべ、

「先生、これだけあれば、ひと月やふた月、水が退かなくっても、安心だろ」

と、いう。

武蔵の眼には涙が溜った。健気よとも添けないともいいようがない。自分はここを開拓して、農土に寄与するものと、ただ気概のみを高く抱いて、自分の餓えるのを忘れていたが、その飢えは、この小さい者に依って、辛くも凌がれているのだった。

だが、自分たち師弟を、狂人呼ばわりしている村の者が、どうして、食物を施してくれたろうか。村の者自身さえ、この洪水では、自身の飢えにおののいているに違いない場合に。

武蔵が、その不審を糺すと、伊織は事もなげに、

「おらの巾着を預けて、徳願寺様から借りて来た」

と、いう。

「徳願寺とは？」

と聞くと、この法典ヶ原から一里余り先の寺で、いつも彼の亡父が、

（おれの亡き後、独りで困った時は、この巾着の中にある砂金を少しずつ費え）

といわれていたのを思い出し、常に、肌身に持っていたその巾着を預けて、寺の庫裡から借りて来たのだ――と、伊織はしたり顔に答える。

「では遺物ではないか」

と武蔵がいうと、

「そうだ、古い家は焼いちゃったから、お父さんの遺物は、あれと、この刀しかない」

と、腰の野差刀を撫でる。

その野差刀も、武蔵は一見したことがあるが、生れからの野差刀ではない。無銘とはいえ。名刀の部に入ってよい品である。

思うに、この子の亡父が遺物として、肌身に持たせておいた巾着にも、少しの砂金ばかりでなく、何か由緒ある物ではなかろうか――それを食物の値に、巾着ぐるみ預けて来たのは、やはり子どもらしいが――又、可憐らしい、と武蔵は思った。

「親の遺物など、滅多に人に渡すものではない。いずれわしが、徳願寺へ行って、貰い返してやるが、以後は、手離すではないぞ」

「はい」
「ゆうべは、その寺に、泊めてもらったのか」
「和尚さんが、夜が明けてから帰れといいましたから」
「朝飯は」
「おらもまだ。先生も、まだだろう」
「ウム。薪はあるか」
「薪ならくれてやる程あるよ。——この縁の下はみんな薪だよ」
莚を巻いて、床下の首を突っ込むと、日頃、開墾するうちに心がけて運んだ木の根瘤だの、竹の根だのが、山をなすほど蓄えてある。
こんな幼い者にでも経済の観念がある。誰がそれを教えたか。まちがえばすぐ飢え死ぬ未開の自然が生活の師であった。
粟飯をたべ終ると、伊織は、武蔵の前へ一冊の書物を持って来て、
「先生、水が退かないうちは、どうせ仕事にも出られないから、書を教えてください」
と、畏まっていった。
外は、その日も終日、吹き歇まない暴風雨の音であった。

三

見ると、論語の一冊である。これもお寺で貰ったのだという。
「学問をしたいのか」
「ええ」
「今までに、少し書を読んだことがあるか」
「すこし……」
「誰に教わった」
「お亡父さんから」
「何を」
「小学」
「すきか」
「すきです」
伊織は、その体から知識を燃やしていった。
「よし、わしの知っている限り教えてやろう。わしに及ばない所は、今に、学問のよい師を見出して就くがよい」
暴風雨の中に、ここの一軒だけは、素読の声と講義に一日暮れて、屋根はふき飛んでも、この師弟は、びくとも膝を立てそうもなかった。
翌日も雨。次の日も雨。
それがやむと、野は湖水になっていた。伊織は、むしろ欣んで、
「先生、今日も」
と、書を出しかけると、
「書はもういい」
「なぜ」
「あれをみろ」
武蔵は、濁流を指さして、
「河の中の魚になると、河が見えない。余り書物に囚われて書物の虫になってしまうと、生きた文字も見えなくなり、社会にもかえって暗い人間になる。——だから今日は、暢気に遊べ、おれも遊ぼう」
「だって、きょうはまだ、外へも出られないぜ」
「——こうして」
と、武蔵はごろりと横になって手枕をかいながら、
「おまえも、寝ころべ」
「おらも、寝るのか」
「起きているとも、足を投げ出すとも、好きにして」
「そして何するんだい」

「話をしてやろう」
「欣しいなあ」
と、伊織は、腹這いになって、魚の尾のように、足をばたばたさせ、
「何の話？」
「そうだな……」
武蔵は自分の少年時代を胸にうかべ、少年の好きそうな合戦の話をした。
多くは源平盛衰記などで聞き覚えた物語である。源氏の没落から平家の全盛にくると、伊織は憂鬱だった。雪の日の常磐御前に、眼をしばたたき、鞍馬の遮那王牛若が、僧正ヶ谷で、夜毎、天狗から剣法をうけて、京を脱出するところへくると、
「おら。義経は好きだ」
と、刎ね起きて、坐り直した。そして、
「先生、天狗ってほんとにいるの」
「居るかも知れぬ。……いや居るな、世の中には。——だが、牛若に剣法を授けたというのは、天狗ではないな」
「じゃあ何？」
「源家の残党だ。彼らは、平家の社会に、公然とは歩けなかったから、皆、山や野にかくれて、時節を待っていたものだ」
「おらの、祖父みたいに？」
「そうそう、おまえの祖父は、生涯、時を得ず終ってしまったが、源家の残党は、義経というものを育てて、時を得たのだ」
「おらだって——先生、祖父のかわりに、今、時を得たんだろ。……ねえそうだろう」
「うむ、うむ！」
武蔵は、彼のその言葉が気に入ったとみえ、いきなり伊織の首を寝たまま抱きよせて、脚と両手で手玉に取って天井へ差し上げた。
「偉くなれ。こら」
伊織は、嬰児が欣ぶように、擽ったがって、きゃッきゃッといいながら、
「あぶないよ、あぶないよ先生。先生も僧正ヶ谷の天狗みたいだなあ。——やあい天狗天狗、天狗」
と上から手をのばし、武蔵の鼻を抓んで戯れ合った。

四

五日たっても十日たっても、雨はやまなかった。雨がやんだと思うと、野は洪水に漲って、容易に濁流が退かないのである。
自然の下には、武蔵も、じっと沈吟しているしかない。
「先生、もう行けるぜ」
伊織は太陽の下へ出て、今朝から呶鳴っている。
二十日ぶりで、二人は道具を担いで、耕地へ出て行った。
そしてそこに立つと、
「あっ……？」
と、ふたりとも茫然としてしまった。
二人が孜々として開拓しかけた面積などは、なんの跡形も残していない。大きな石ころと、一面の砂利であった。前には無かった河が幾筋もできて小さな人力を嗤うが如く、奔々と、その大石や小石を弄んでいた。
——阿呆、狂人。
土民たちが嘲った声も思い出される。思い知ったのである。
手の下しようもなく、黙然と立っている武蔵を見上げて、伊織は、
「先生、ここはだめだ。こんな所は捨てて、もっと他のよい土地を探そう」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com